

学位論文要約

条件的知識に着目した 説明的文章の読解方略指導に関する研究

資料構成

- | | |
|--------------|-------|
| 1. 論文の構成 | ・・・1 |
| 2. 研究の目的と方法 | ・・・2 |
| 3. 各章の概要 | ・・・4 |
| 4. 主要引用・参考文献 | ・・・11 |

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

古賀 洋一

1.論文の構成

序章 研究の目的と方法	1
第1節 研究の目的	2
第2節 研究の方法	4
第3節 研究の意義	5
第1章 読解方略指導の観点から見た説明的文章指導研究と授業実践の成果と課題	6
第1節 読解方略の概念規定	7
第2節 読解方略指導の観点から見た説明的文章指導研究の成果と課題	12
第3節 説明的文章の読みの授業実践における読解方略指導の展開—2000年以降を中心に—	34
第4節 説明的文章指導研究と授業実践の検討を通じた研究課題の設定	55
第2章 中学校説明的文章教材の論証の「方略的読み」の系統性の検討	62
第1節 説明的文章の読み方の読解方略としての捉え直し	63
第2節 論証の読解方略の拡張—「物語」による論証の観点から—	81
第3節 論証の「方略的読み」における条件的知識の記述	99
第4節 中学校説明的文章教材の論証の「方略的読み」の系統性の検討	110
第3章 〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉の構築	146
第1節 自己調整学習モデルの検討	147
第2節 〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉の構築	166
第3節 〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉の有効性を検証する観点	173
第4章 条件的知識の学習過程の解明—授業観察を通して—	178
第1節 授業実践の分析の観点の設定	179
第2節 小学校高学年の読解方略指導における条件的知識学習の段階性の解明	181
第3節 中学校段階の読解方略指導における条件的知識の学習過程の解明	214
第4節 〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉の再構成	230
第5章 条件的知識の学習を促進する指導法の検証—実験授業を通して—	234
第1節 階層的な論証構造読解の困難性	235
第2節 〈二種類の「文脈」の配列〉の有効性の検証—実験授業Ⅰを通して—	236
第3節 〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉の有効性の検証—実験授業Ⅱを通して—	250
第4節 〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉の再構成	277
第6章 読解方略指導のカリキュラムの構築—小学校高学年から中学校段階を対象に—	280
第1節 授業観察と実験授業から得られる読解方略指導のカリキュラムへの示唆	281
第2節 条件的知識に着目した読解方略指導のカリキュラムの構築—小学校高学年から中学校段階を対象に—	294
終章 研究の成果と課題	298
第1節 研究の成果と展望	299
第2節 研究の課題	302
あとがき	304

2.研究の目的と方法

(1)研究の目的

説明的文章の読解指導研究では、1980年代に読み手の主体性を重視した指導論が提出された。読み手による推論、あるいはそれを踏まえたうえでの批評的な読みへの着目である。

こうした動きの中、推論的、批評的な読みを柔軟に行うための学力として導入されたのが「読みの目的の達成に向けて、意識的かつ柔軟に活用される読み方」、すなわち読解方略の概念である。読解方略は宣言的知識、手続き的知識、条件的知識という三つの知識の総体として成立するものであり、「意識性」や「選択性」、「統合性」の階梯的性質を持つ点に特徴がある。とりわけ、条件的知識は「選択性」と「統合性」を担う知識であり、その意味で方略概念にとって本質的かつ不可欠な知識である。推論的、批評的な読みを柔軟に行うためには、目的や状況に応じて柔軟に方略を活用する「方略的読み」を遂行できることが必要であり、そのための知識が条件的知識ということになる。

読解方略の具体、学習論と指導論、カリキュラムの構築という三つの観点から説明的文章指導研究の展開を概観した場合、そこには次のような成果と課題が見られる。

一点目は、読み方の特定と拡張が見られることである。説明的文章の読み方には、読解指導と読み手の言語生活との接続を図る動きや、社会の要請に応える動きの中で特定されてきたものもあるが、その中心は、読みの対象となる「論理」概念を捉え直す動きの中で特定されてきたものである。ただし、これらを方略概念の観点から見ると、読み方が独立で列挙されるに留まっている。では、これまで特定されてきた読み方を方略として捉え直した場合、条件的知識はどのような知識として記述されるのか。読み手が抱く目的との関係や、一連の読解過程における位置づけの観点から検討される必要がある。

二点目は、読解方略の学習論と指導論が現実的な教室の水準で構築されていることである。国語科教育学では1990年代中頃に方略概念が導入されて以降、学習者の認知構造に注目が集まり、方略の学習過程がモデル化されてきた。また、1980年代に提出された指導論は、2000年代に入って読解方略の指導論として捉え直されてきた。しかしながら、これらは手続き的知識に焦点を当てたものとなっており、条件的知識を含んだ形での方略の学習と指導の問題は論じられていない。授業実践の水準では条件的知識の学習に達したと思われるものも散見されるが、その指導は単元を一貫したものとはなっていない。では、条件的知識の学習を説明する理論モデルとはどのようなものであり、現実的な読み手は条件的知識をどのような過程で学習するのか。指導法の有効性についても、これらを基盤として実証される必要がある。

三点目に、「計画としてのカリキュラム」と「学びの履歴としてのカリキュラム」との「総体」としてのカリキュラムの構築が、読解方略指導の領域で見られることである。読み方同士の間には系統性を打ち立てるのは、計画の側面への着目である。これらの知見を踏まえて継続的な授業実践を行い、カリキュラムへ結びつける研究も見られる。その一方、これらの展開を方略概念の観点から見ると「選択性」と「統合性」は視野に入れられていない。条件的知識の観点を含んだ形での読解方略指導のカリキュラムは、どのようなものか。系統性を基盤に据えるとともに、具体的な授業実践を通して構築される必要がある。

以上を踏まえ、本研究では次の5点の研究課題を設定した。

- ①「論理」の「方略的読み」で活用される条件的知識の記述を把握するとともに、その系統性を明らかにする。

かにする。

- ②「論理」の読解方略における条件的知識の学習過程の理論モデルを構築する。
- ③構築したモデルを記述理論として用い、現実的な読み手が条件的知識を学習する過程を解明する。
- ④条件的知識の学習を促進する説明的文章の読解方略指導の方法を、特に学習指導過程の観点から提案し、その有効性を実証する。
- ⑤読解方略指導が本格化する小学校高学年から中学校段階を対象に据え、条件的知識の観点を含んだ形での読解方略指導のカリキュラムを構築する。

ここに示すように、本研究では、「論理」の読解方略における条件的知識の記述と系統性を検討したうえで、その学習過程を理論と実践の両面から解明し、それを基盤として指導の問題を実証的に探究する。最終的には、それらの知見をカリキュラム構築へ集約させることを目的とする。

(2)研究の方法

本研究では、米国の文章理解研究をもとに方略概念を規定したうえで、いくつかの方法を複合的に用いながら上記の課題を解決する。一つ目は、発達に関する理論研究と、教材分析を通した解釈学的方法とを組み合わせることによる条件的知識の記述の把握と系統化である。二つ目は、方略学習に関する理論研究と授業観察とを組み合わせることによる条件的知識の学習過程の解明である。三つ目は、方略の指導法に関する理論研究と実験授業による仮説の検証を通した指導法の提案と実証である。以上の成果を総合して、カリキュラムを構築する。

これらの方法を各章に位置付け、手順として具体化すると、次のようになる。

第1章では、方略概念を規定したうえで、説明的文章指導研究の理論的検討と、2000年以降の説明的文章の読みの授業実践の調査・分析を行い、研究課題を再設定する。

第2章では①の研究課題に取り組む。まず、各理論的立場から提案されてきた読み方を読解方略として捉え直す。そのうえで、検討対象を論証の読解方略へ絞り込む。論証の「方略的読み」で活用される条件的知識の記述を発達研究も踏まえながら把握したうえで、中学校各学年の説明的文章教材を分析し、論証の「方略的読み」の系統化を図る。

第3章では②に取り組む。第2章で検討した条件的知識の記述や系統性を踏まえ、自己調整学習理論を読解方略における条件的知識の学習モデルとして捉え直す。このことを通して、〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉を構築する。

第4章では③の研究課題に取り組む。読解方略指導が本格化する小学校高学年から中学校にかけて授業観察を行い、そこで得られた資料を〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉に沿って分析し、条件的知識の学習過程を解明する。ここでの成果を踏まえて、モデルを再構成する。

第5章では、再構成したモデルに沿って二つの実験授業を実施し、④の研究課題を解明する。実験授業Ⅰでは、「類似文脈」と「複数文脈」という二種類の「文脈」を配列した指導法を提案し、有効性を検証する。実験授業Ⅱでは、実験授業Ⅰの成果と課題を踏まえ、学習指導過程へと指導法を発展させる。

第6章では、前章までの成果を集約しながら⑤の研究課題に取り組む。「計画としてのカリキュラム」の側面を指導内容編成論と指導方法論が、「学びの履歴としてのカリキュラム」の側面を学習過程論が担う。両者の「総体」としての具体的なカリキュラム構築を目指す。

3.各章の概要

第1章 読解方略指導の観点から見た説明的文章指導研究と授業実践の成果と課題

本章では、読解方略の概念規定を行ったうえで、その観点から説明的文章指導研究と読みの授業実践の成果と課題を検討し、研究課題を再設定した。

第1節では、米国の文章理解研究をもとに、本研究における読解方略の概念規定を行った。具体的には、読解方略は宣言的知識、手続き的知識、条件的知識という三つの知識の総体として成立するものであり、「意識性」「選択性」「統合性」の階梯的性質を持つものとして規定した。「意識性」とは個々の読み方が読み手に意識化されている性質を、「選択性」とは複数の読み方の中から適切なものが選び取られる性質を、「統合性」とは複数の読み方が組み合わせられて活用される性質を指す。中でも、条件的知識は「選択性」と「統合性」を担う知識であり、その意味において方略概念にとって本質的、かつ不可欠な知識として位置づけた。

第2節では、指導内容となる読解方略の具体、方略の学習と指導、カリキュラムという三つの観点を設定し、1980年代以降の説明的文章指導研究の成果と課題を検討した。その結果、国語科教育学では手続き的知識へと注目が集まり、その学習と指導の問題が現実的な教室の水準で論じられている一方で、条件的知識の問題についてはほとんど言及されていないことが明らかになった。

第3節では、教育雑誌から特定の理論的立場には依拠しない授業実践を、1990年4月から2014年3月にかけて514例収集した。各年代の授業実践を指導目標、学年段階、方略の階梯的性質の観点から分析し、2000年以降の授業実践の成果と課題を検討した。その結果、小学校低学年から中学校までの全学年段階で「意識性」に達した授業実践が多く見られた。その一方で、「選択性」「統合性」に達した授業実践は中学校段階を中心に少数見られたのみであり、その意図的な指導も単元の導入で局所的に行われるに留まっていた。条件的知識の学習を促進する指導法の有効性を、学習指導過程の観点から実証することの必要性が見出された。

以上を踏まえ、第4節で、先にも述べた5点の研究課題を再設定した。

第2章 中学校説明的文章教材の論証の「方略的読み」の系統性の検討

本章では、「論理」の読解方略における条件的知識が、どのような知識として記述されるのかを明らかにするとともに、「方略的読み」の系統性を検討した。

第1節では、これまでに様々な理論的立場から提案されてきた読み方を、①一連の読解過程における位置づけ、②読みの目的との関係、③方略を構成する読み方相互の連関という三つの観点から検討し、読解方略として典型的に捉え直した。その結果、「A：読む準備のための方略」「B：実用に供するための方略」「C：知識獲得のための方略」「D：他人に伝えるための方略」「E：理解し、納得するための方略」「F：意見を確立するための方略」という方略の類型が得られた。情報量の増加やその送り手の多様化といった社会的状況に鑑みると、特に指導が求められるのは「E」と「F」の方略である。教材配列や発達研究の知見を踏まえ、特に中学校段階で教授と学習の対象になるものとして位置づけた。これらの方略は論証構造の読み方を中核としながらも、そこにレトリックの読み方が組み合わせることによって構成されるものである。両者は論証とレトリックを批判的に読む点では共通しているが、読解が目前の文章で留まるか、他の文章にまで及ぶかで異なりを見せる。

第2節では、歴史や経験の記述に用いられる「物語」概念を援用し、「E」と「F」の方略を「物語」に

よる論証の観点から拡張した。その際、「物語」の説得性に多くを依存した中学校教材を複数分析し、解学的に方略を導出した。「筆者の『物語』の因果関係を読解するための方略」と「筆者の『物語』による論証を読解するための方略」とがそれぞれに特定された。

以上の方略を活用する「方略的読み」において、条件的知識はどのように記述されるのかを、第3節では検討した。まず、米国の文章理解研究の成果をもとに、特定の文種に限らない一般的な文章理解過程における条件的知識の機能とその記述を検討した。その結果、条件的知識は、読解前局面では「読みの目的と文種」との関わりで、読解中局面では「文章の構造的側面」と「読みの困難」との関わりで働くことが見出された。次に、説明的文章読解の発達研究の知見を踏まえ、条件的知識の記述の具体化を図った。その結果、論証の「方略的読み」における条件的知識は、次のような知識として記述できた。

- ①「筆者の論証の妥当性を理解し、納得する」「筆者が論証している問題に対して意見を確立する」という目的を達成するために、説明的文章を読むときには、論証構造を読解するための方略を「選択」すれば良い。
- ②論証構造を明示する「合図」があるときは、そこで示された論証構造を読解するための方略を「選択」すれば良い。
- ③論証構造に着目するだけではその妥当性が判断できず、文彩や説得的定義、論証の一部を担う非連続型テキストが見られるときは、それらの読解方略を「再選択」し、論証の読解方略と「統合」すれば良い。
- ④筆者の主張が複数見られ、単一の論証構造に着目するだけではその妥当性が判断できないときは、論証構造を読解するための方略を「再選択」し、それら同士を「統合」すれば良い。

ただし、これらの記述は網羅的なものである。そこで第4節では中学校各学年の教材を分析し、「方略的読み」の系統化を試みた。その際、中学校説明的文章教材の一般的な段階性を踏まえ、論証構造、文彩、説得的定義、イデオロギーという4つ読解対象を選定した。イデオロギーに関しては方略の具体が明らかではないため、方略の特定に並行して取り組んだ。

教材分析の結果、学年段階ごとの教材の共通性と差異性に応じて以下の系統性が想定できた。

- ①一年生教材、中でも教科書前半部分の教材では、論証の読解方略を明示的に指導するとともに、それらをどのような目的に向けて「選択」すれば良いのかを指導することが求められる。
- ②一年生教材の後半になると、事実主張から価値主張へと論証を発展させる教材が見られ始める。こうした論証構造は二年生、三年生教材では基本形である。階層的な論証構造を読解するための方略の「統合」が、中学校段階で繰り返し指導が求められる中心的な「方略的読み」と考えられた。
- ③二年生教材の特徴として、価値主張を読み手に受け入れさせるために、論証を構成する命題に文彩と説得的定義とが併用される点が挙げられた。複数の対象を読解するための方略の「統合」が、二年生から三年生にかけて特に指導が求められる「方略的読み」と考えられた。
- ④三年生、とりわけ教科書後半に位置づけられる教材では、象徴作用を持つ記号を通した論証が見られ、「筆者のイデオロギー性」が潜在するようになる。こうした傾向は、高等学校の評論教材では顕著になる。三年生後半以降では、論証構造の読解とイデオロギー批評との「統合」が求められると考えられた。

第3章 〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉の構築

本章では、自己調整学習理論を読解方略における条件的知識の学習の観点から捉え直し、〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉を仮説的に構築した。

第1節では、条件的知識の学習過程を詳細に説明できる理論として自己調整学習理論に着目し、情報処理理論と社会的認知理論にもとづく自己調整学習モデルをそれぞれに取り上げて検討した。その結果、後者のモデルは自己調整学習過程を「計画」「遂行／意志的制御」「内省」の三つの段階から成るサイクルと見なしており、「内省」段階における「適応」の局面で条件的知識が学習されると想定されていた。また、この立場のモデルは、それを枠組みとした方略指導が実施されるなど、現実的な教室への適応可能性を持つモデルとして位置づけることができた。

ただし、そうした意義が見出される一方で、読解方略における条件的知識の学習モデルとして適用するに当たっては、自己調整学習過程の各段階で課題が見出された。「計画」段階における「読みの目的」と「理解目標」との関係、「遂行／意志的制御」段階における「文章の構造的側面」の位置づけ、「自己内省」段階における「適応」を引き起こす要因である。第2節では、これらの観点に即応して社会的認知理論の自己調整学習モデルを捉え直し、〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉を構築した。その要諦は以下の通りである。

- ①「計画」段階では、〈読みの目的の設定と文種の特定〉〈階層的な『理解目標』の設定〉を新たに位置づけた。筆者の主張の理解や納得、自分の意見の確立といった目的に向けて、論証を含む文章を読むときに、論証の読解方略は活用されなければならない。目的と文種の如何を問わずに論証を批判的に読もうとすることは方略的というよりも、むしろスキルのである。目的と文種が特定された際、読み手は「理解目標」を階層化させ、低次な目標から高次な目標へと一つ一つの基準をクリアしながら、最終的な目的を達成していくことになる。
- ②「遂行／意志的制御」段階では、〈論証読解のコントロール〉と〈理解状況のモニタリング〉とが交互作用しながら、論証読解が進行すると捉えた。論証読解は明示的な命題を把握することから始まる。その中で批判的な意見が形成されたりすると、それに応じて論証読解がコントロールされる。こうした交互作用の中で、論証構造の再構造化、暗黙の要素への着目へと読解が進む。
- ③「自己内省」段階で条件的知識は学習される。「読みの困難」の原因が方略へ帰属(方略帰属)されたときに、「適応」が引き起こされると想定された。

こうして構築したモデルを枠組みとして、第4章では条件的知識の学習過程の解明を、第5章では指導法の検証を行った。

第4章 条件的知識の学習過程の解明—授業観察を通して—

本章では、小学校高学年と中学校の授業観察で得られた資料をそれぞれに分析し、条件的知識の学習過程を解明した。

第1節では授業実践を分析する際の観点を設定した。以下のようなものである。

- 「読みの困難」と「方略帰属」の後に引き起こされる「適応」の具体的過程とはどのようなものか。
- 条件的知識の学習を促進する協同的過程は、どのような過程として特徴づけられるのか。
- 各学年段階で学習可能な条件的知識はどの水準のものか。

また、本章で実施した授業観察が、当該学級や学年の学習履歴を踏まえたうえでの観察であることか

ら、カリキュラムへの示唆を得ることも目的として設定した。ここでは、自己調整能力の発達に関する先行研究を踏まえ、次のような仮説を立てた。

○方略の「選択」「統合」それ自体に習熟させる指導から、方略を活用して意見を形成させる指導へと段階的に指導を積み重ねることによって、継続的に条件的知識の学習水準が深まるとともに、方略を「選択」「統合」しながら意見を形成できる読み手が育つのではないか。

第2節では、小学校高学年の授業観察で得られた資料を分析し、当該の学年段階で学習可能な条件的知識の水準を特定するとともに、カリキュラムへの示唆を得た。分析の結果、観察対象とした授業実践では、「個々の方略を意識化させる段階」から「方略の『選択』『統合』に習熟させる段階」、「意見形成を目的とした指導の文脈の中で、方略を『選択』『統合』させる段階」へというマクロな指導の段階性が設定されていた。こうした段階性は先行研究から得られた仮説とも一致するものであったとともに、実際に条件的知識の水準を深めさせ得るものであった。

第3節では、中学校の授業観察で得られた資料を分析し、条件的知識の学習過程と、それを促進する協同的過程の特徴を解明した。観察対象の授業実践は自己調整学習理論を背景に構想されたものでも、条件的知識の指導を意図したものでもなかった。しかし、そこで見られた協同的過程は自己調整学習過程に大きく一致しており、条件的知識の学習を促進させるものであった。それは、次の四局面から構成される過程として特徴づけられた。(a)協同的な課題分析を通して既存の方略が計画、活用される局面、(b)既存の方略では解決できない学習課題が設定され、「読みの困難」と「方略帰属」が生じさせられる局面、(c)「読みの困難」が明確化され、それと結びつける形で宣言的知識が説明される局面、(d)手続き的知識を言語化したものが説明され、「読みの困難」が解消される局面である。

以上の協同的過程の中で条件的知識は学習されていく。その学習過程には二通りのものが見られた。双方に共通していたのは、「読みの困難」と「方略帰属」が条件的知識の学習の契機になることである。その後の過程は次の二通りである。一つには、「読みの困難」と宣言的知識とが結合し、困難の解消が予期されたときに、条件的知識も学習されるという過程である。いま一つは、「読みの困難」と手続き的知識とが結合し、困難が解消されたときに学習されるという過程である。

こうした成果を反映させる形で、第4節では〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル〉を再構成した。

ただし、授業観察のみでは、中学生が「統合性」の条件的知識を論証読解の水準で学習できるのかは明らかにならなかった。実験授業を通じた解明が求められた。

第5章 条件的知識の学習を促進する指導法の検証—実験授業を通して—

本章では、〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル(再構成版)〉に沿って条件的知識の学習を促進する指導法を構想し、実験授業を通して有効性を検証した。その際、二つの実験授業を通して、段階的な検証を行った。

第1節では、中学校段階で中心的に指導が求められる条件的知識は、階層的な論証構造を読解するために方略を「統合」する条件的知識であることを再確認するとともに、その学習困難性を指摘した。

第2節の実験授業Ⅰでは、「類似文脈」と「複数文脈」とから成る〈二種類の「文脈」の配列〉の有効性を検証した。これは「自己内省」段階に焦点化し、「読みの困難」と「方略帰属」を意図的に引き起こすために設計したものである。「類似文脈」とは「既習教材と主教材とが共通の論証を備えており、既

有の方略を『選択』することで『理解目標』に到達できる学習同士の関係を、「複数文脈」とは「既習教材の論証が主教材では部分に埋め込まれており、複数の方略を『統合』しなければ『理解目標』に到達できない学習同士の関係」を指す。この仮説を検証するために実施した実験授業で得られた資料を分析した結果、〈二種類の「文脈」の配列〉は「読みの困難」と「方略帰属」を引き起こし、条件的知識の学習を促進する指導法であることが実証された。

他方、課題として、方略の「統合」に至らない学習者が散見された。ここには二つの原因が想定された。一つには、「類似文脈」に対して方略を活用できなかったことである。方略を活用したうえで「読みの困難」を意識化することが「方略帰属」を引き起こすからである。いま一つは、条件的知識が学習されていたにも関わらず、「統合」には至らなかった可能性である。方略の「統合」は必ずしも能動的に行われる訳ではなく、「読みの目的」や「読みの困難」といった条件を協同的に振り返る必要があった。

これらの原因は、「自己内省」段階のみに焦点を当てた指導では、条件的知識は十全には学習されないことを示している。また、実験授業Ⅰは必ずしも論証の「方略的読み」に焦点を当てていない。さらなる実験授業が求められた。

第3節の実験授業Ⅱでは実験授業Ⅰの課題に対応して、次の二点を発展させた。一つは、「統合性」の条件的知識の学習を階層的な論証読解の水準へ引き上げることである。いま一つは、単元を一貫して条件的知識の学習を促進させる指導過程へと仮説を拡張することである。指導過程を構想するに際して、学習課題に対してどの方略を活用すれば良いかを協同で分析させる〈協同的な課題分析〉を単元の導入段階で、方略の「選択」「統合」とその「成果」との因果関係を事後的に認知させる〈協同的な省察〉を単元の終末段階で取り入れることが、条件的知識の学習に有効であることが仮説として見いだされた。これらを実験授業Ⅰの成果と総合し、〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉として提案した。

以上のモデルに沿って、階層的な論証構造を備えた中学二年生教材を主教材として実験授業を構想・実施した。分析の結果、〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉は、階層的な論証構造を読解するための条件的知識の学習を促進させるものであった。また、そこで学習された条件的知識は他の文章を読む際にも機能し、方略の転移性を保証し得るものであった。

ただし、以上の成果が見られる一方で、「選択性」の水準に留まる学習者も一定数見られた。方略の「統合」は継続的な指導の中で徐々に習熟される性格も持っていることが示唆された。

第4節では実験授業で見られた学習過程と協同的過程を踏まえ、指導過程モデルを再構成した。その際、次のような改善を施した。

- ①単元の導入段階で、方略的ではない読みを表出させる局面を位置づけること。ここで生まれた読みの対立、「読みの困難」を引き起こすものとなる。また、こうした素朴な読みは、〈協同的な省察〉の際、学習者が「成果」を取り出す際の比較材料ともなる。
- ②「類似文脈」と「複数文脈」とをそれぞれに読解させる場面では、方略の「選択」「統合」によって得られた「成果」を言語化させること。方略の「選択」「統合」とそこで得られた「成果」との因果関係が明示されたときに、条件的知識は学習される。
- ③〈協同的な省察〉の場面では、どのような文章を読解するときに、どのような方略の活用が求められ、それによってどのような理解が形成されたかという三つの要素の関係を言語化させること。すなわち文章の条件、それと対応して求められる「方略的読み」、「方略的読み」を通して得られる「成果」という三項間の結合が、条件的知識を学習させることになる。

第6章 読解方略指導のカリキュラムの構築—小学校高学年から中学校段階を対象に—

本章では、小学校高学年から中学校段階を対象として、条件的知識に着目した読解方略指導のカリキュラムを構築した。

第1節では、授業観察と実験授業から得られた資料を、各学年段階の指導内容、指導の段階性、指導段階に応じた指導方法という三つの観点から再検討し、カリキュラム構築への示唆を得た。

まず、指導内容の観点から得られた示唆は次の三点である。

- 小学校高学年から条件的知識の指導を位置づけていくことは十分可能である。ただし、事柄の配列に表れたレトリックに限定的である。
- 中学校一年生段階から論証読解の水準で条件的知識の指導を位置づけることは可能である。
- レトリックは表現形式に顕在化しているが、論証構造は表現形式とは必ずしも一致しない。その点で、前者よりも後者の方が読解方略学習の難易度は高い。小学校高学年でレトリックの読解方略を、中学校段階で論証の読解方略を指導内容とするのが妥当である。

次に、指導の段階性の観点から得られた示唆は次の点である。

- 小学校高学年の授業観察で見られた指導の段階性は、継続的に条件的知識を指導していくうえで一つのモデルと捉えられる。中学校段階でも、そうした段階性を取り入れていく必要がある。

最後に、指導方法の観点から得られた示唆は次の点である。

- 小学校高学年の読解方略指導でも〈二種類の「文脈」の配列〉と〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉とを指導原理として取り入れることで、条件的知識を効果的に学習させることができる。
- 「方略の『選択』『統合』に習熟させる段階」では〈二種類の「文脈」の配列〉もある程度の有効性を持つ。一方、「意見形成を目的とした指導の文脈の中で、方略を『選択』『統合』させる段階」では、〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉への拡張が不可欠である。
- 小学校高学年と中学校の読解方略指導を接続する方法には、次の二つが考えられる。一つは、文章構成や修辭的設疑法を根拠と主張を把握する指標として用いることである。いま一つは、事例の配列に表れたレトリックと論証とが持つ説得力の違いを区別させることである。いずれにしても、論拠への着目が両者を接続させる契機となる。

以上の示唆を踏まえ、さらには前章までの研究成果も集約させながら、第2節で条件的知識に着目した読解方略指導のカリキュラムを構築した。次頁表1のものである。

横軸には、読解方略の類型、教材の構造、指導内容となる条件的知識、指導方法の原理を位置づけた。これは、指導を構想する際の手順に沿ったものである。指導内容を特定するためには、読解方略の類型を把握したうえで教材の構造を分析する必要がある。どの方略を「選択」「統合」させれば良いのかが明確になり、指導内容となる条件的知識が具体化されるからである。具体的な指導を組み立てる際には、方法論を踏まえることによって、理論的根拠をもって単元を構想することができる。ただし、これらはいくまでも指導の基本的原理を示したものであり、教材の特性や学習者の実態に応じて柔軟に変形していく必要がある。

縦軸には、指導間の巨視的、微視的な段階性を位置づけた。小学校高学年ではレトリックの読解方略が、中学校では論証の読解方略が指導内容となる。それらは、指導の段階が「方略の『選択』『統合』に習熟させる段階」から「意見形成を目的とした指導の文脈の中で、方略を『選択』『統合』させる段階」

へと達するにしたがって、それぞれ「E」から「F」の方略へ移行する。

【表1】条件的知識に着目した読解方略指導のカリキュラム試案

学年 段階	読解方略の類型	教材の構造	指導内容となる 条件的知識	指導方法の原理
小学校 高学年	E:理解し、納得するための方略 (レトリックの読解が中心) ↓ F:意見を確立するための方略 (レトリックの読解が中心)	事柄の配列のレトリックを 複数含む入れ子構造	レトリックの読解方略の「選択」	「類似文脈」の配列
			レトリックの読解方略同士の「統合」 (筆者の意図の推論的理解を目的として) ↓ (教材に対する意見の形成を目的として) ↓ (社会に対する意見の形成を目的として)	(二種類の「文脈」の配列) (自己調整学習過程を反映した指導過程)
中学校 1年生	E:理解し、納得するための方略 (論証構造の読解が中心) ↓ F:意見を確立するための方略 (論証構造の読解が中心)	事実主張の論証	「論拠」への着目を契機とした論証の読解方略の意識化 (レトリックの読解から論証の読解への移行)	・論証を把握する指標としてのレトリックへの着目 ・レトリックと論証の説得性の違いの区別
階層的な論証構造		論証の読解方略同士の「統合」	「類似文脈」の配列	
文彩と説得定義とを併用した論証		論証の理解を目的として ↓ 教材あるいは具体的問題への意見形成を目的として	論証と文彩、説得的定義との「統合」 (二種類の「文脈」の配列)	
中学校 2年生				
中学校 3年生		象徴作用を持つ記号を通した論証	論証読解とイデオロギー批評との「統合」 支配的言説を改変するための意見形成を目的として	(自己調整学習過程を反映した指導過程)

特に中学校段階では、「F」の中にも系統性がある。こうした系統性を持つ「方略的読み」を学習させていくためには、論証理解に向けて方略を「統合」させる指導を複数くり返すことで習熟を図り、そのうえで意見の形成を目的とした指導へと発展させる必要がある。前者の段階では〈二種類の「文脈」の配列〉も有効性を持つが、後者では〈自己調整学習過程を反映した指導過程モデル〉への拡張が不可欠である。

以上に示した本カリキュラムは「方略的読み」の系統性、各学年段階における条件的知識の学習水準、学習モデルを土台にした指導法を集約したものであり、その系統性と指導法は授業実践を通して実証・修正がなされたものである。その意味で「計画としてのカリキュラム」と「学びの履歴としてのカリキュラム」との「総体」としてのカリキュラムであり、妥当性と実行可能性を併せ持つものと考えられた。

終章 研究の成果と課題

終章では、本研究の成果を総括するとともに、今後に残された研究課題を述べた。

第1節では、本研究の成果を研究課題に沿って総括した。以下のものである。

①条件的知識の記述とその系統性の解明

…論証の「方略的読み」で活用される条件的知識の記述を明らかにするとともに、中学校各学年の

「方略的読み」の系統性を解明できた。発達に関する理論研究と教材分析とを組み合わせることで、妥当性と具体性を併せ持つものとなった。

②条件的知識の学習過程の理論モデルの構築

…論証の読解方略指導における条件的知識の学習過程をモデル化できた。授業観察の成果を踏まえることによって、現実的な教室の水準で機能するものとなった。

③条件的知識の学習過程の解明

…現実的な教室の水準で見られる条件的知識の学習過程を解明し、〈説明的文章の読解方略の自己調整学習モデル(再構成版)〉として理論化することができた。

④条件的知識の学習を促進する指導法の提案

…指導法をモデル化し、その有効性を実証することができた。これは理論的根拠を持ちながらも、実践の事実から再構成されたものであり、妥当性と実行可能性が保証されたものである。

⑤条件的知識の観点を含み込んだ形での読解方略指導のカリキュラムの構築

…「方略的読み」の系統性、条件的知識の学習水準、学習モデルを土台とした指導方法を集約し、「計画としてのカリキュラム」と「学びの履歴としてのカリキュラム」との「総体」としてのカリキュラムを構築できた。具体性と実行可能性を備え、教師の指導の構想にも役立つものとなった。

しかしながら、以上の成果が得られる一方で課題も残されている。第2節では、本研究の課題を、研究の成果から直接的に導き出される課題と、論究の過程で見出された別のテーマに関わる課題との両面から把握し、それぞれに言及した。

まず、本研究の成果から直接的に導き出される課題は、次の三点である。

○小学校高学年から中学校段階までの各学年段階における条件的知識の発達の解明。

○階層的な論証構造を読解するための方略の「統合」以外の条件的知識に焦点を当てた指導法の開発と実証。

○中学校段階の継続的な授業観察を通じたカリキュラムの妥当性の検証とさらなる再構成。

次に、別のテーマに関わる課題は、次の二点である。

○説明的文章の読解指導に関する教師の実践的知識の形成過程の解明。

○表現指導、とりわけ議論文の表現指導に関する理論的、実践的研究の推進。

4.主要引用・参考文献

①英文

Almasi, J. F., & Fullerton, S. K., 2012, *Teaching Strategic Processes in Reading SECOND EDITION*.THE GUILFORD PRESS.

Goldman, S. R., & Rakestraw, Jr, J. A., 2000, Structural Aspect of Constructing Meaning From Text. *HANDBOOK OF READING RESEARCH Vol. III*, pp.311-335

Lorch, Jr. R. F., Lorch, E. P., & Klusewitz, M. A., 1993, College student's conditional knowledge about reading. *Journal of Educational Psychology*, Vol.85, No.2

McNamara, D. S., Ozuru, Y., Best, R. & O'Reilly, T., 2007, The 4-pronged comprehension strategy framework. In McNamara, D. S., (eds.), *Reading comprehension strategies: Theories, Interventions, and technologies*. New York: Lawrence Erlbaum Associates, pp.465-491

- Paris, S.G., Lipson, M.Y., & Wixson, K.K., 1983, Becoming a Strategic Reader. *Contemporary Educational Psychology*, Vol. 8, pp.293-316
- Paris, S. G., Wasik, B. A., & Turner, J. C., 1991, The Development of Strategic Readers. *Handbook of reading research*, Vol.2, pp.609-640
- Zimmerman, B. J., & Kitsantas, A., 1999, Acquiring Writing Revision Skill: Shifting from Process to Outcome Self-Regulatory Goals, *Journal of Educational Psychology*, Vol. 91, No. 2, pp.241-250
- Zimmerman, B. J., & Campillpo, M., 2003, Motivating self-regulated problem solvers. In Davidson, J. E., & Sternberg, R. J., (Eds.), *The Psychology of problem solving*, New York: Cambridge University Press, pp.233-262.

②和文(含翻訳書)

- 浅野梢英『論証のレトリック』講談社, 1996年
- テリー・イーグルトン著, 大橋洋一訳『イデオロギーとは何か』平凡社, 1999年
- 坂場良久「イデオロギーとレトリック」鈴木健・岡部朗一編『説得的コミュニケーション論を学ぶ人のために』世界思想社, 2009年, pp.217-251
- 絲川佐知子「学習方法を明確にした指導」『教育科学国語教育』No.703, 2009年, pp.44-47
- 犬塚美輪「国語教育における自己調整学習」自己調整学習研究会編『自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ—』北大路書房, 2012年, pp.137-156
- 井上尚美『言語論理教育への道—国語科における思考—』一光社, 1977年
- 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—(増補新版)』明治図書, 2007年
- 岩永正史・堀之内志直「大学生はランダム配列の説明文をどのように再構成するか—大学生の説明スキーマを探る—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第13巻, 2011年, pp.121-127
- 岩永正史・皆川恵子「小学校説明文教材系統案作成の試み(3)~小学校国語教科書6年分の説明文教材の分析を通して(2)~」『山梨大学教育人間科学部紀要』第15巻, 2013年, pp.113-119
- 大河内祐子「論説文におけるアーギュメントの理解」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻, 2000年, pp.131-138
- 小田迪夫『説明文教材の授業改革論』明治図書, 1986年
- 小田迪夫「説明文の指導—何のために, 何を, どう学ばせるか—」小田迪夫・渡辺邦彦・伊崎一夫編著『二十一世紀に生きる説明文学習—情報を読み, 活かす力を育む—』東京書籍, 1996年, pp.1-15
- 河野順子『〈対話〉による説明的文章の学習指導—メタ認知の内面化の理論提案を中心に—』風間書房, 2006年
- 河野順子「『批評読みとその交流』に関する—考察—メタ認知的知識としての条件的知識に着目して—」『国語教育学研究の創成と展開』編集委員会編『国語教育学研究の創成と展開』溪水社, 2015年, pp.203-212
- エリン・オリヴァー・キーン著, 山元隆春・吉田新一郎訳『理解するってどういう事?—「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物—』新曜社, 2014年
- 吉川芳則「説明的文章の展開構造のメタ認知を促す学習指導」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第54集, 2003年, pp.59-66
- 光野公司郎『国際化・情報化社会における国語科教育—論証能力の育成指導を中心として—』溪水社,

2004年

- 三宮真智子「メタ認知研究の背景と意義」三宮真智子編『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房, 2008年, pp.1-16
- 渋谷孝『説明的文章の指導過程論』明治図書, 1973年
- 渋谷孝『説明的文章の教材研究論』明治図書, 1980年
- ディル.H.シャンク「社会的認知理論と自己調整学習」バリー.J.ジーマーマン・ディル.H.シャンク編著, 塚野州一編訳『自己調整学習の理論』北大路書房, 2006年, pp.119-147
- ディル.H.シャンク「目標設定—学習の自己調整の基本的能動的源—」ディル.H.シャンク・バリー.J.ジーマーマン編著, 塚野州一編訳『自己調整学習と動機づけ』北大路書房, 2009年, pp.221-243
- バリー.J.ジーマーマン「学習調整の自己成就サイクルを形成すること:典型的指導モデルの分析」ディル.H.シャンク・バリー.J.ジーマーマン編著, 塚野州一監訳『自己調整学習の実践』北大路書房, 2007年, pp.1-19
- 鶴田清司『対話・批評・活用の力を育てる国語の授業—PISA型読解力を超えて—』明治図書, 2010年
- 寺井正憲「説明的文章の読解指導論—認知的側面から見た形式主義・内容主義の検討—」筑波大学国語国文学会編『日本語と日本文学』第8号, 1988年, pp.9-17
- 寺井正憲「説明的文章の読解指導研究の文献レビュー—問題状況に関する現状認識を中心に—」筑波大学国語指導研究会編『国語指導研究』第3集, 1990年, pp.21-38
- スティーヴン.トゥールミン著, 戸田山和久・福澤一吉訳『議論の技法 トゥールミンモデルの原点』東京図書, 2011年
- 中村敦雄『日常言語の論理とレトリック』教育出版センター, 1993年
- 難波博孝・牧戸章『「言語活動の心内プロセスモデル」の検討—国語学力形成の科学的根拠の追究—」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第44集, 1997年, pp.11-20
- 西垣順子『児童期後期における読解力の発達に関する研究』北大路書房, 2002年
- 野内良三『レトリック入門—修辞と論証—』世界思想社, 2002年
- 野家啓一『物語の哲学』岩波現代文庫, 2005年
- 八田幸恵・渡邊久暢「探求を導く『問い』を設定する能力の育成—高校国語科現代文『こころ』の授業研究を通して(2)—」福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻編『教師教育研究』Vol.6, 2013年, pp.299-327
- スコット.G.パリス・ジェームズ.P.バーンズ・アリソン.H.パリス「自己調整的な学習者はどのような理論・アイデンティティ・行動を構築するか」バリー.J.ジーマーマン・ディル.H.シャンク編著, 塚野州一編訳『自己調整学習の理論』北大路書房, 2006年, pp.251-286
- デボラ.L.バルター「綿密な事例研究法を使用した自己調整学習の研究」B.J.ジーマーマン・D.H.シャンク編, 塚野州一・伊藤崇達監訳『自己調整学習ハンドブック』北大路書房, 2014年, pp.270-282
- 福澤一吉『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』NHK出版, 2012年
- 舟橋秀晃「指導の系統を意識した教材配列を—話題にとどまらせることなく—」日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』No.404, 2005年, pp.16-21
- 米国学術研究推進会議編著, 森敏昭・秋田喜代美監訳『授業を変える 認知心理学のさらなる挑戦』北大路書房, 2002年

- 前野佳彦『近代日本研究の方法的基礎 ハーバード・ノーマンをモデルとするイデオロギー分析概論と演習』テクネ、2015年
- 間瀬茂夫「文章構造にそった説明的文章の〈方略的読み〉の過程」『広島大学教育学部紀要』第2部第43号、1994年、pp.13 - 22
- 間瀬茂夫「説明的文章の読みにおける『論理』の再検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第58号、2009年、pp.103-111
- 間瀬茂夫「説明的文章の論証理解における推論—協同的な過程における仮説的推論を中心に—」全国大学国語教育学会編『国語科教育』第70集、2011年、pp.76-83
- 間瀬茂夫「説明的文章の読みにおける知識と推論」『国語教育学研究の創成と展開』編集委員会編『国語教育学研究の創成と展開』溪水社、2015年、pp.229-241
- 丸野俊一「特集にあたって：『心の働きを司る「核」としてのメタ認知』研究 - 過去、現在、未来 -」心理学評論刊行会編『心理学評論』第50巻第3号、2007年、pp.191 - 203
- 丸野俊一「適応的なメタ認知をどう育むか」心理学評論刊行会編『心理学評論』第50巻第3号、2007年、pp.341 - 351
- 森田信義『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』明治図書、1989年
- 山元隆春「読みの『方略』に関する基礎論の検討」『広島大学学校教育学部紀要』第1部第16巻、1994年、pp.24 - 40
- オリヴィエールブル著・佐野泰雄訳『レトリック』白水社、2000年
- 渡邊久暢「高校国語科評論文における読解方略指導のあり方—学習者による『振り返り』に焦点を当てて—」『福井大学教育実践研究』第36号、2011年、pp.1-12